

「持続可能な地域社会の実現とそれを支える新しい地域金融の在り方」 —場所文化フォーラムの実践を通して—

税理士

場所文化フォーラム代表幹事

「とかちの・・・」大店長

合同会社場所文化機構副代表

NPOものづくり生命文明機構地域活性化協議会事務局長

NPO健康医療開発機構理事

吉澤 保幸

2009. 11. 25

1. 第2回ローカルサミットin松山 宇和島 (1/21~23)

第2回ローカルサミット宣言

ローカルサミットに続き、今年もまた全国から志民が、四国松山・宇和島に集った。

昨年のローカルサミットの際にグローバル資本主義に起因する人類・地球・いのちを巡る諸問題を提起した。昨年秋のいわゆる100年に一度といわれる金融危機によって、それらの問題が一挙に表面化した。お金が主人公となり、経済効率性と利潤を追求する市場原理主義、グ

ローバリズムが行き詰まり、人間の物的欲望充足を追求してきた物質文明が終わりを告げようとしていることを肌で感じつつ、そこから抜け出せない我々がいる。新たな時代・新たな文明をどのように紡ぎ出していくのか、悠久の時間に思いを馳せながら、車座になって、熱く語りあった。

ここに参加者を代表して、全国、全世界の志民に向けて、次のように宣言する。

我々が扉を開けようとする新たな文明とは、全てのいのちがこの美しい地球に育まれていることを強く感じる人間からなる。人間や動植物のみならず、天地を形づくる地水火風空すべてにいのちが宿ることを感じて祈り、己を含めたすべての多様ないのちの輝きに感動し、それらが時空を超え一つの大きないのちとして結び合い、輝いていることを心が了解する人間である。そして、土に根ざし、生と死からなるいのちの営みを営々と紡ぎ、伝えていく社会からなる。それは、我々日本の民衆が、縄文以来の稲作漁撈文明のもとで培い、守ってきた自然観、世界観に他ならない。「利他の心」と「慈悲の心」に立脚した生命文明、すなわち、人と自然との共生、すべてのいのちが繋がりあう文明こそが、新たな文明の核心となろう。物質文明を支える経済活動は有限であるが、大きないのちの輝きの価値は無限である。

そして、いのちの輝きは祈りをこめた手仕事に結晶する。

第2回ローカルサミット宣言

「生命文明」は、「確かな未来は懐かしい過去にある」という確信に
を携え、それぞれの生と死を見据えるローカルな地域を基点に、人
と自然、人と人、世代を超えてのいのちの、新たな結び合いを紡ぎつつ、それぞれの地域で共
生、共創する志民によってこそ構築されるであろう。

我々志民は、こうした了解を共有しつつ、そこから具体的に持続可能な地域社会をトータルに
デザインしていくために、いのちを巡る8つの分野につき、これまでの実践を踏まえて深く議論
し、各分野について、以下のような具体的指針を提言することとした。

<食・農>

『志民が「農」とのつながりを見つめ直し、地域での顔の見える信頼関係を紡いでいく。土、水、
作り手の多様性を大切に、持続する環をつくり、笑顔で参加する志民を増やす。』

<環境・森里海連環>

『森里海連環基本法（憲章）の制定を行い、総合的な環境政策を実行する。経済性・効率性
優先から、自然に対する理解と自然の側からの発想を基にした「生命文明」に考え方の転換
を図り、江戸時代の循環型生活様式の知恵に学び、統合された一次産業の再生こそが日本
の再生、環境問題の解決の鍵である。孤立した個別科学・縦割りの政策から転換し、統合さ
れた科学・技術に基づく総合的な政策へ転換を図り、各地域で実践していく。』

<まちづくり>

『私たちの手の届く範囲としての地域において、私たちが生き生きと活動することができる地域
を志向する。そのためには、非市場経済的な価値観を前提に、ミッション指向型の行動を興し
ていく。そのことが私たちに、賢明（懸命）に生きるに値する場所を啓示する。だからこそ、
何よりもまず、私たちが、死民から市民へ、そして志民へと志向するとき、「まちづくり」活動は
「まち育て」運動へ深化する。』

第2回ローカルサミット宣言

『地域の恵みを地域で楽しむ「地恵地楽」を提唱する。地域資源を丹念に育て、あるいは磨き込み、旨いモノ、美しいモノに仕上げ、世の中に伝えていく。内からの努力と共に、外(=よそ者)の力を受け入れ、互いに学び合い、伝え合う手間と時間が必要である。作り手がモノづくりに専念できる環境づくりも、必須である。そこで生まれた本物を世の中に出す「本質を伴った演出」がキーである。そこに新しい流通が生まれる。』

<地域金融>

『助け合い金融の機能をも担った無尽・講などの伝統の叡智に学びつつ、グローバルマネーの複利・短期投融資の論理から脱却するローカルファイナンス(志民金融)を漸次、各地で、志民と地域金融機関、自治体との連携の中で創出していく。お金はそれ自身目的ではなく、いのちを紡ぐ手段であり、その時、リターンも、お金ではなく、感謝・信頼の証として得ることになる。高度に技術化した金融を手仕事の文脈でとらえ直し、金融にいのちのぬくもりを取戻す。』

<教育>

『次世代を育てる地域の学校教育においては、3つの力の融合が不可欠となる。「学校力」は、自然界が有する多様性を、学校という場を通じて子どもたちに自らのアイデンティティーを確認させ、他との関わり合いの中で共感的に理解をしていくことを可能とする力であり、「教師力」とは、教育的愛情と使命感を持ち、豊かな人間性を礎として子どもに関わり合い、子どもが自ら動くことを引き出す力をさす。そして子どもが身に付ける「人間力」とは、過去からの「いのちの繋がり」を踏まえ、自分の足元をしっかりと見つめ、その上で自らの次の行動を選択する力であり、家族や社会の一員として誇りと責任を持ちつつ、それぞれの才能を開花させる力である。』

第2回ローカルサミット宣言

『自宅で生まれ、自宅で亡くなる例が減り、生と死を見つめる、あるいは感じる機会が失われてきている。「十分生きた価値があったと皆で讃えて、寄り添い、看取る」環境を、それぞれの地域で、住民自らが創りあげていくことが肝要である。老若男女、心身に障害のある方を含む全ての人々が、足るを知り、利他の心で支えあう「地域共助」が、持続可能な健康医療を支える礎となる。』

<アジア連携>

『ローカルかグローバルかの二極論から脱し、異なる視座を持つ者同士が発見し、協力することが多様な文化を残す唯一の策と考え、そのためにも、いのちをつなぐキラキラ人をつくりキラキラ人がキラキラ人を生む循環を構築していく。』

これらの各指針は、それを相互に関連させていくことで、持続可能な地域社会をトータルに構築していく基本設計となるものである。志民自らが、それぞれの地域で自治体や地域金融機関、商工業者、医療・教育機関、政治等の立場から、土に根ざし、いのちを分かち持つ同じ志民として役割分担をしつつ連携し、これらを実践すること、そして、地域を越えて志民と志民が相互に連帯していくことにより、確かな未来を切り拓くことができると確認した。

価値観の転換を伴うこれらの実践を通じて、我々志民は、グローバル化する市場経済や国家のみに依存するのではなく、地域における新たな結び合いをつかみ直し、無事でいのちが輝く暮らしを実感し、次世代に着実に地球のいのちを繋いでいくことが可能になるものと確信する。

平成21年11月23日

-1. ローカルサミットの議論の軸

地球環境と私たちの暮らしを両立させる。

世界観、価値観の転換が求められている。

「いのちの原点に立ち返って、
すべてのつながりを意識する」
「経済活動はいのちをつなぐ
活動と位置づける：稲作漁撈文明」

右肩上り社会は、**FORECAST**

(未来を予測する) 「ビジョン」

持続可能社会は、**BACKCAST**

(未来から振り返る) 「シナリオ」

いずれも頭の中で構想するもの

営々とつづく社会は、**BACKBACKCAST**

「逆ビジョン」

懐かしい過去に確かな未来がある。

過去の事実に向けて暮らしをまもる。

1-3. 逆ビジョンとは

ものづくり生命文明機構

目標

人類の発展・繁栄

生物種の絶滅回避・存続

理念・世界観

人間中心主義 人間優先主義
人間と自然は分離／対立・支配
成長・発展・進化

山川草木国土悉皆成仏
人間は自然の一部／共生・融合
持続可能性・循環

時間との関わり

線的(始点から終点へ)
生と死は対立

球的(始点と終点が一定しない)
生と死は不可分

ひととの関わり

人間の知覚しうる世界での環境作り
(身体能力は人間の知覚できる要素
によって支えられている)
ひとりで生きていく

人間の知覚できない世界を含めた環境作り
(生命能力は人間の知覚できない要素によっても支
えられている。例:ハイパーソニック)
まわりに生かされていく

ものとの関わり

人工物重視(自然からの分離・加工)

自然物重視(自然からの学習・活用)
(例:ネイチャーテクノロジー)

カネとの関わり

増価性と利子蓄積
信用・利殖の創造・増加

減価性と利子放棄
信頼・感謝の創造・継続

経済との関わり

利益中心主義
(市場における競争による利益の拡大—排他的)

価値中心主義
(互いの切磋琢磨による価値の実現—協調的)

地域との関わり

地域と地域は競争
都市と農村は分断

地域と地域は共生・協調
都市と農村は交流

2. 逆ビジョンにおける「おカネの関わり」の意味すること

の論理—「お金がお金を生む」資本の論理を問う

逆ビジョンにおける「おカネの関わり」)

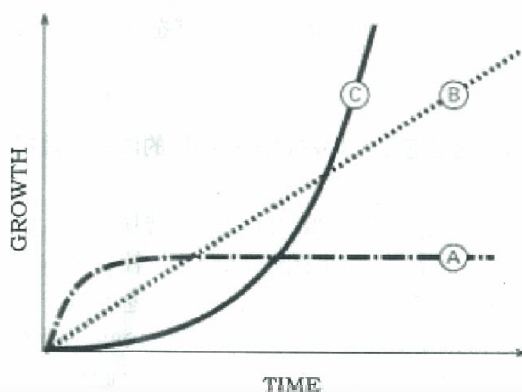
- 増価性と利子蓄積 ⇒ 減価性と利子放棄
- 信用・利殖の創造・増加 ⇒ 信頼・感謝の創造・継続

逆ビジョンの意味するところ—従来の資本の論理を問い直す)

- 人間による自然資源搾取の下での成長・発展 ⇔ 利子・利殖 ⇔ お金がお金を生む論理
↓
- 人間が自然・いのちとともに成熟・持続 ⇔ 利子なし・廻す ⇔ いのちの道具としての論理
⇒ お金の質を変えて、いのちを繋ぐ道具としてのお金の使い方が問われる

<参考 : マルグレット・ケネディ「金利ともインフレとも無縁の貨幣」による明確な説明>

BASIC TYPES OF GROWTH PATTERNS



- ・A : 自然界の成長曲線
- ・C : ガン細胞の成長曲線、現在の通貨システムの要求
現在の経済システムは地球上の全天然資源を食い尽くす運命に
引用 : 廣田裕之「持続可能な発展向けの補完通貨」より
原典 : Inflation and interest-free money (Margrit Kennedy)

A. Natural curve
B. Linear curve
C. Exponential curve

お金の論理—民衆による様々な実践からの学び

●大恐慌時の実践からの学び

- 大恐慌の処方箋として、利子をはずした地域通貨による欧米の成功事例があった！
- 地域通貨の理論的原点（減価するお金」と実践の意義（高い流通速度）」は重要
- 日本の昭和恐慌の際の対応は、無尽、講の柔軟かつ相互扶助の仕組みの活用による

⇒地域通貨は、資本の論理（貨幣の蓄積と自己増殖）」に囚われない志民自らが発行する自由貨幣であり、いのちを紡ぎ、繋ぐ、本来のいのちを廻す道具となる。
そして、そこには、従来のお金では換算されない価値も表出させることができる。

欧米等での金融実践を踏まえ、庶民金融の原点に学ぶ)

●地域金融機関の原型からの学び

- すべての銀行が単一になってグローバル資本主義を支えるのが、金融自由化の枠組み
- 日本の銀行が単一化する中で、欧米では、1980年代以降、マイクロファイナンスやソーシャルバンク、オルタナティブバンク等の進展による、多様な金融構造が顕在化しつつある
- 日本のかつての相互銀行/信金/信組は、金融自由化の波の中で存在意義が希薄化

⇒今一度、地域（庶民）金融の原点に立ち戻り、多様で柔軟な金融構造を構築すべき

の論理 — いのちの道具としてのお金の上手な使い方

付託可能な地域を又えるローカルマネーフローの創出のための金融機能の再考)

● 利子をはずした (利子無し、あるいは減価) 時に見える金融の3つの帰結



お金を稼ぐのでは無く、いのちの道具として上手に「使うこと」を考える

- ① お金を「貯留する」大事な使い方 : いのちを次世代に伝えるため (いのちの危機に備える)
- ② お金を「扶助する」温かい使い方 : いのちを紡ぎ、温かく繋ぐため
- ③ お金を「廻す」上手い使い方 : いのちを紡ぎ、繋ぐためのエンジンとして



この結果、

- ① 時間軸が換わり (長期の実物へのお金の貯留)、
- ② お金ではない形での報酬を頂き (農作物等の自然の恵みの交付)、
- ③ 相互扶助の役割を果たし、
- ④ これまでお金に換算されなかった価値を表出させることも、可能になる。



お金は、お金を生むこと自体を目的とせず、地域での雇用創出と事業継続、新たなヒト・モノの流れの拡大によって、いのちのつながりといのちへの感謝・感動を生むことになる。



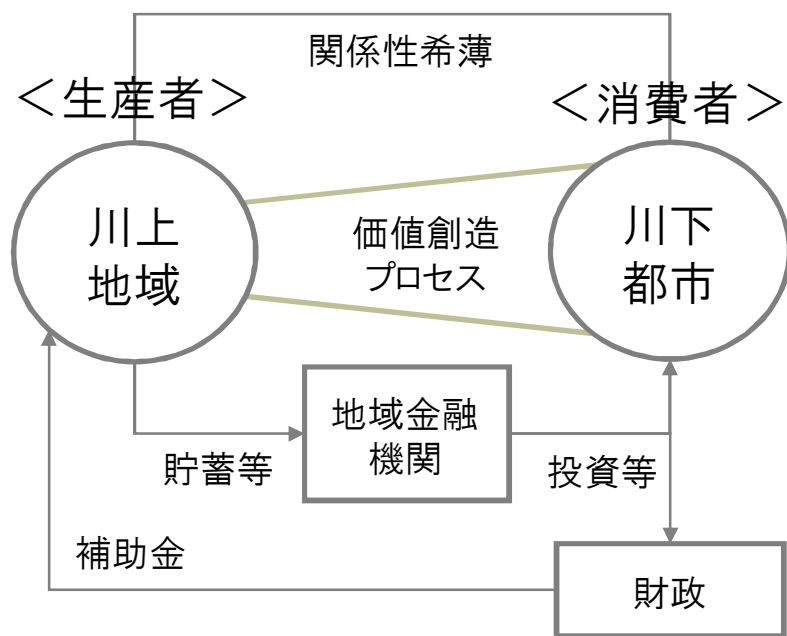
● こうしたローカルマネー創出を自ら見える形で廻すお金の作り方とそれを組み込んだ、いのちの結び合いの仕組み (Q.B) を構想、具体化する⇒ トータルな地域デザインへ

地域社会のトータルデザインー新たな地域金融の意味

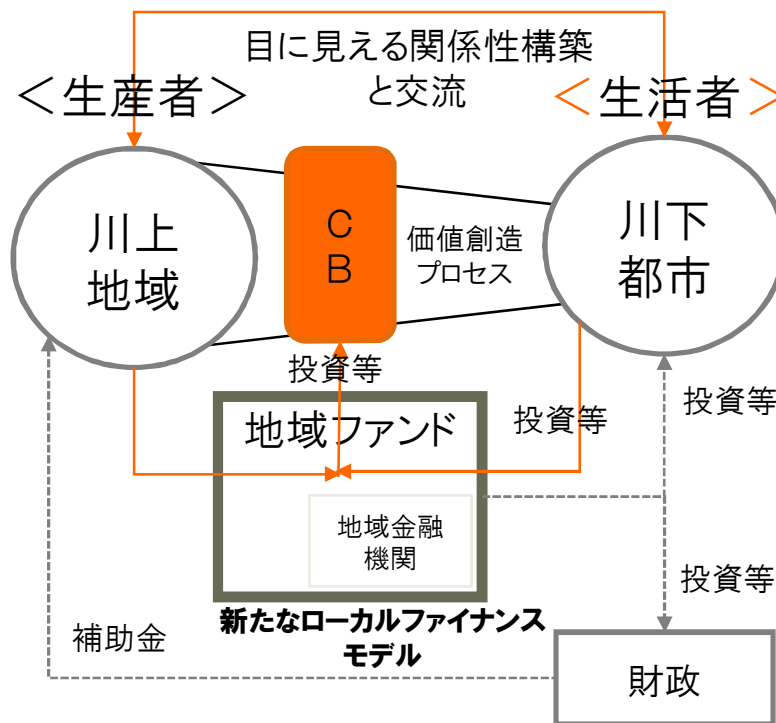
<社会構図の変化イメージ>

- 地域活性化は、川下から川上へのヒト・モノ・カネへのシフトと新たな関係性構築が鍵
- 同時にそれを支えるローカルマネーフロー創出が不可欠

[現代社会の構図]

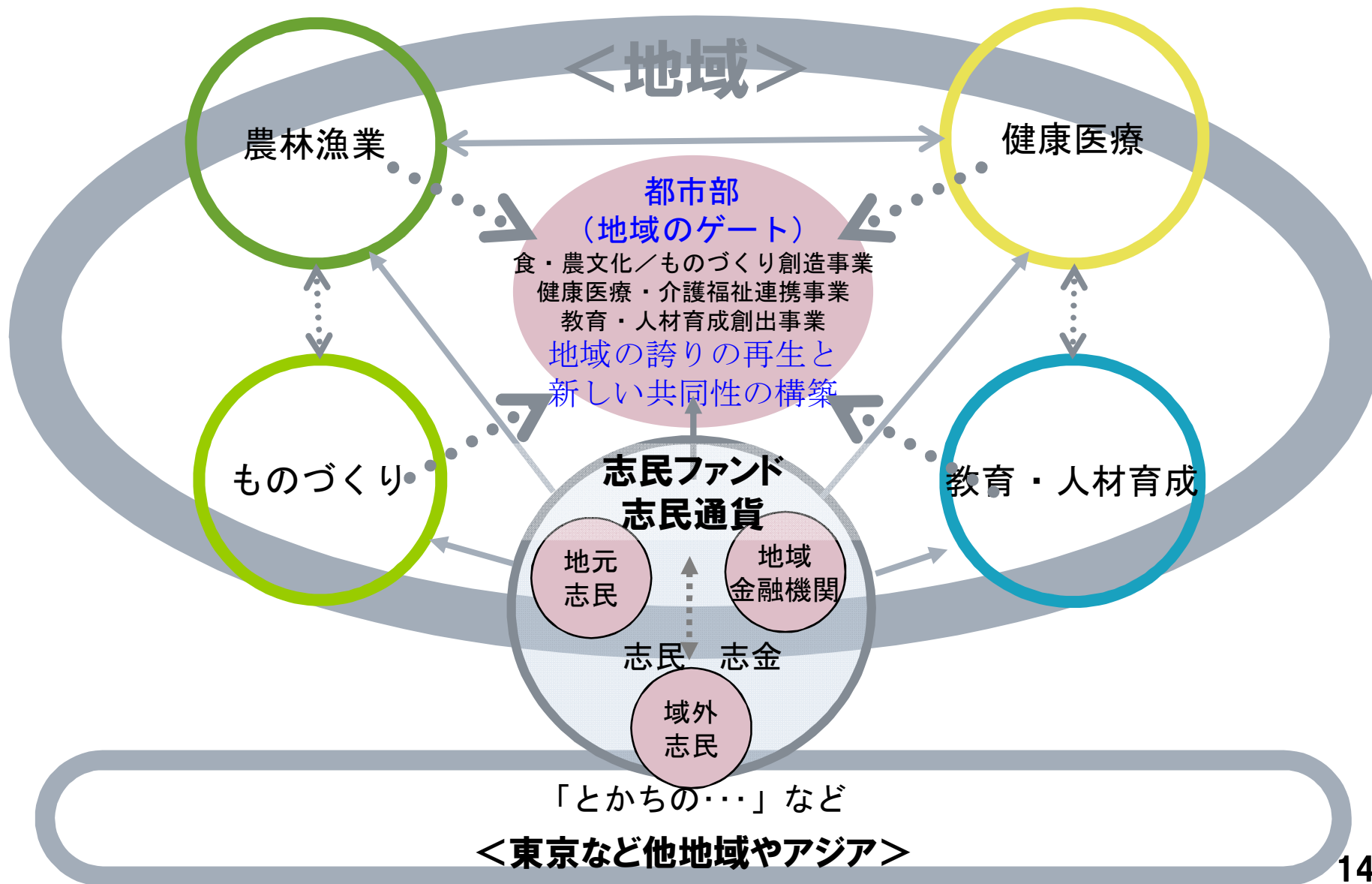


[我々の目指す社会構造]



とれない地域デザイナー「いのち」の3分野の連携

いのちの3分野連携、新たな金融の仕組み、他地域間連携



3. 持続可能な地域社会デザインとお金の上手な使い方 —場所文化 フォーラムの実践 検討事例紹介—

「場所文化フォーラム 2003年8月発足」の概要と目的

■ 「場所文化フォーラム」の目標

「場所文化」の創造によって、人々の新たな交流(地方と都市の新たな関係性の確立等)を促し、場所への資金流入と域内での資金循環の新たな仕組みを構築し、場所の自立(経済の活性化とコミットメント人口の増加、持続可能性の確保)を目指す。

■ 「場所文化」の戦略的意義(現代社会の変革のキーワードとして)

「場所文化」とは、行政区画に拘らず、自然に包摂された一定のローカル空間(場所)において営まれる人間の歴史的生活とそこでの自然との向き合いの中で紡ぎだされた言葉、景観、価値観、生活様式など(言わば風土)を言う。

「場所文化」は、画一化し、自然を破壊してきた近代西欧文明への警鐘と、各場所が持つ多様かつ自然と共生する価値観への転換という、強いメッセージが込められている。

■ 我々のアプローチは、場所の自立と都市との交流による自然との共生・循環モデルの構築

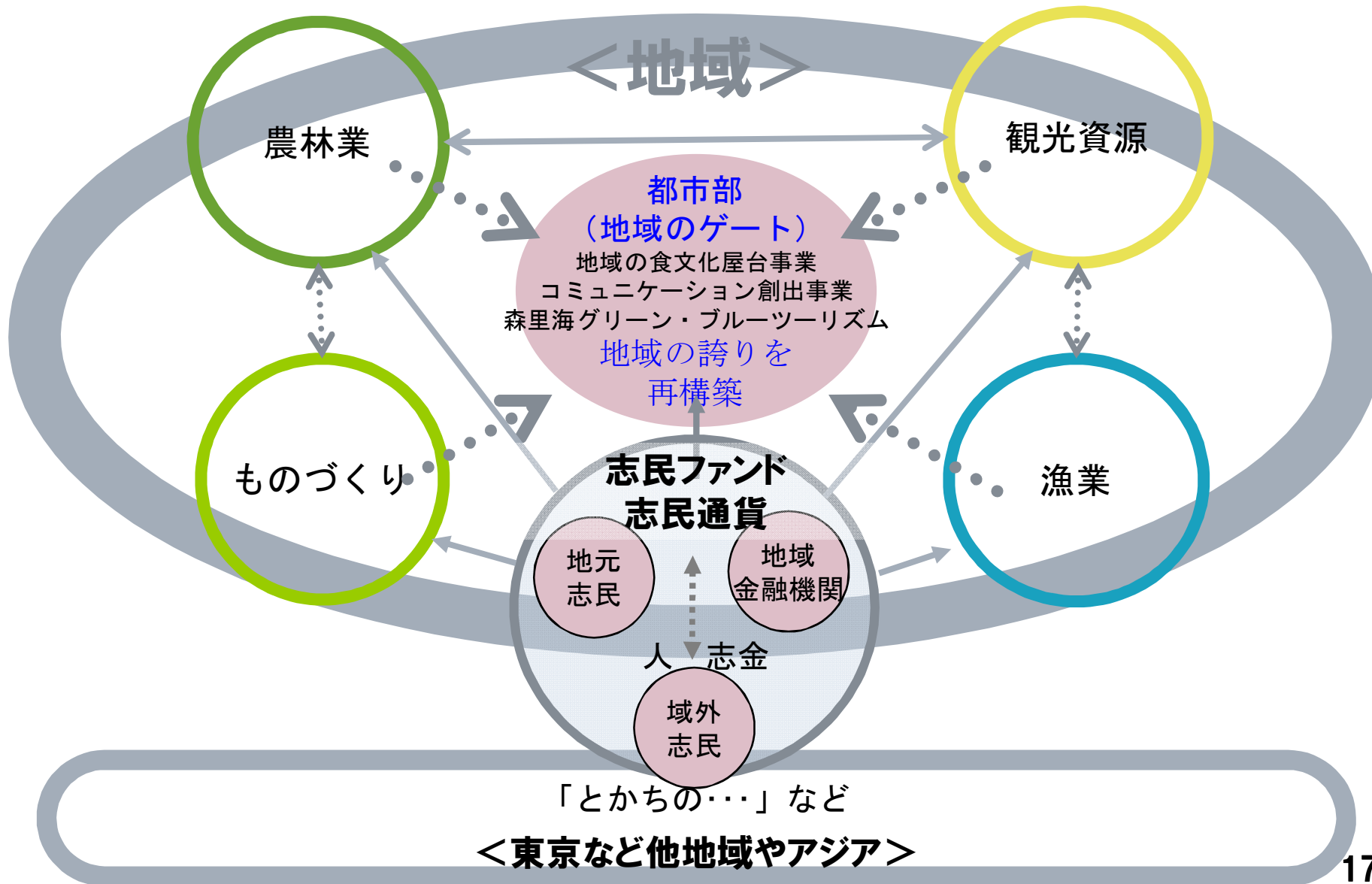
ー場所文化を語り～場所文化を感じ～場所文化を創るー

- ①各地域での多様な「場所の価値」の再発見による自らの誇りの創出が起点(意識変革:ない⇒ある)。
- ②そして各地域が開きながら都市との対等・補完の関係を構築し、それを支えるヒト・モノ・情報の継続的な交流を可能とする新しいお金(志金)の流れを組み込んだビジネス・ファイナンスモデルを運営しつつ、場所文化を磨いていく。
- ③こうした各地の動き(*)が連動し、地域が元気になり、都市の人々と共に自然との共生、自然の恵みやいのちへの感謝の価値観を日本社会全体が取り戻す。

(*)連携の場所:十勝、金山、福島、高崎、勝沼、小田原、富山、愛媛、高知、熊本、鹿児島、etc

賑わいと交流人口の創出とお金の質を変える実践

＜賑わい・交流人口の創出：農商工・森里海連携+新たなお金の流れ+他地域間連携＞



「とちの...」(2007.6.オープン)の実践—賑わいと地域への入り口—

(1)食による「場所文化」創造モデルの具体化(オープン後2年経過、順調な運営)

食文化には、その場所文化が凝縮されているが、「とちの...」では、十勝の豊かな自然に育まれた安心・安全の食材(野菜・お肉・チーズ等)や勝沼の国産ワイン等を作り手の拘わりや各場所の場所文化の語りを添えて、都会の方々に提供することで、

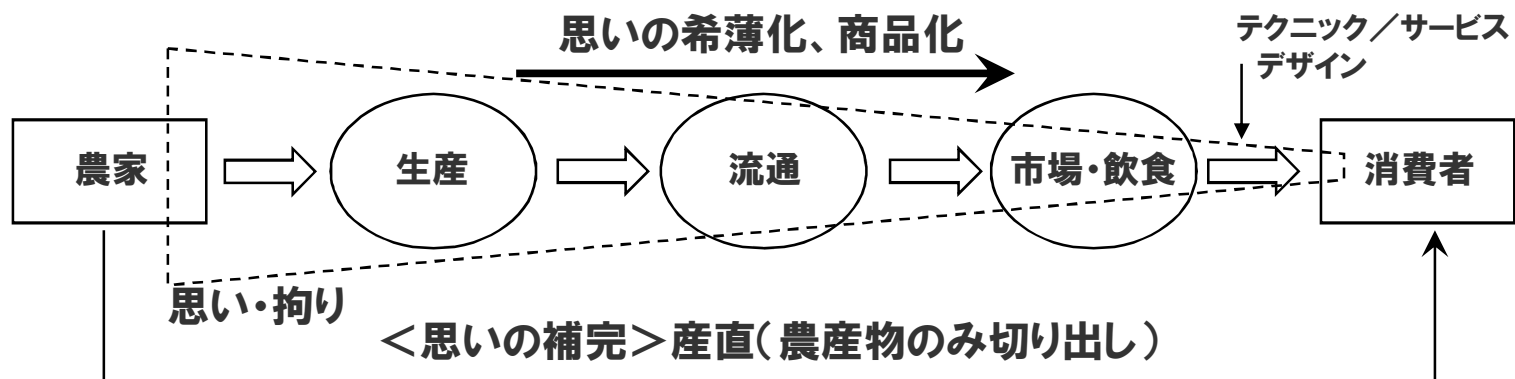
- ・十勝・勝沼等が持つ豊かな自然との営み、共生を実感し、
- ・健康で新鮮、かつ作り手の顔が見える安心な食材を食す喜びを得、
- ・その感動の対価としてのお金に新たな意味合いを認識し、
- ・「とちの...」を起点に、十勝・勝沼と都市住民との新しい継続的交流が始まる



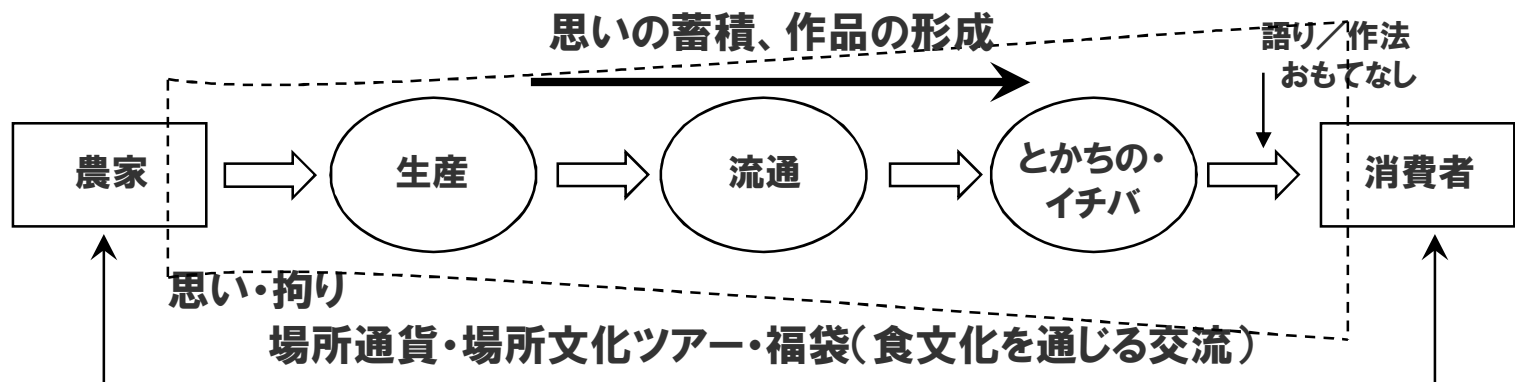
「とちの・・・」の実践 — 「流通を変える！」

(2) 「産直」とは違う場所の食文化の表現(=新たな農生産～流通～消費の仕組みの形成)

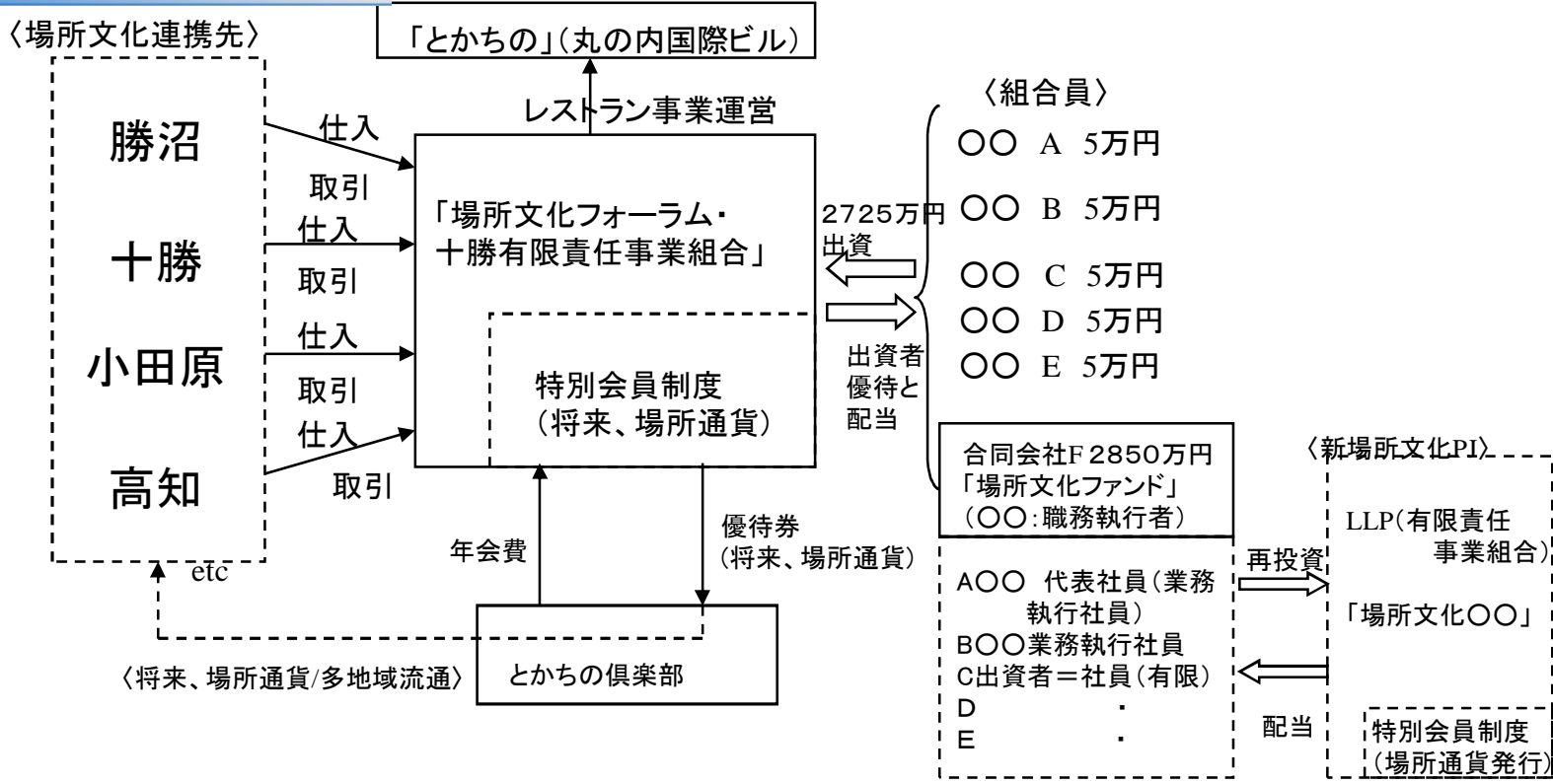
<従来の市場・飲食> : 対価の意味 = 希少性、調理、サービスへの充足の対価



<とちの・・・> : 対価の意味 = 自然の恵み、農への感謝、感動の表現



「とちの・・・」の実践—「お金の質を変える！」

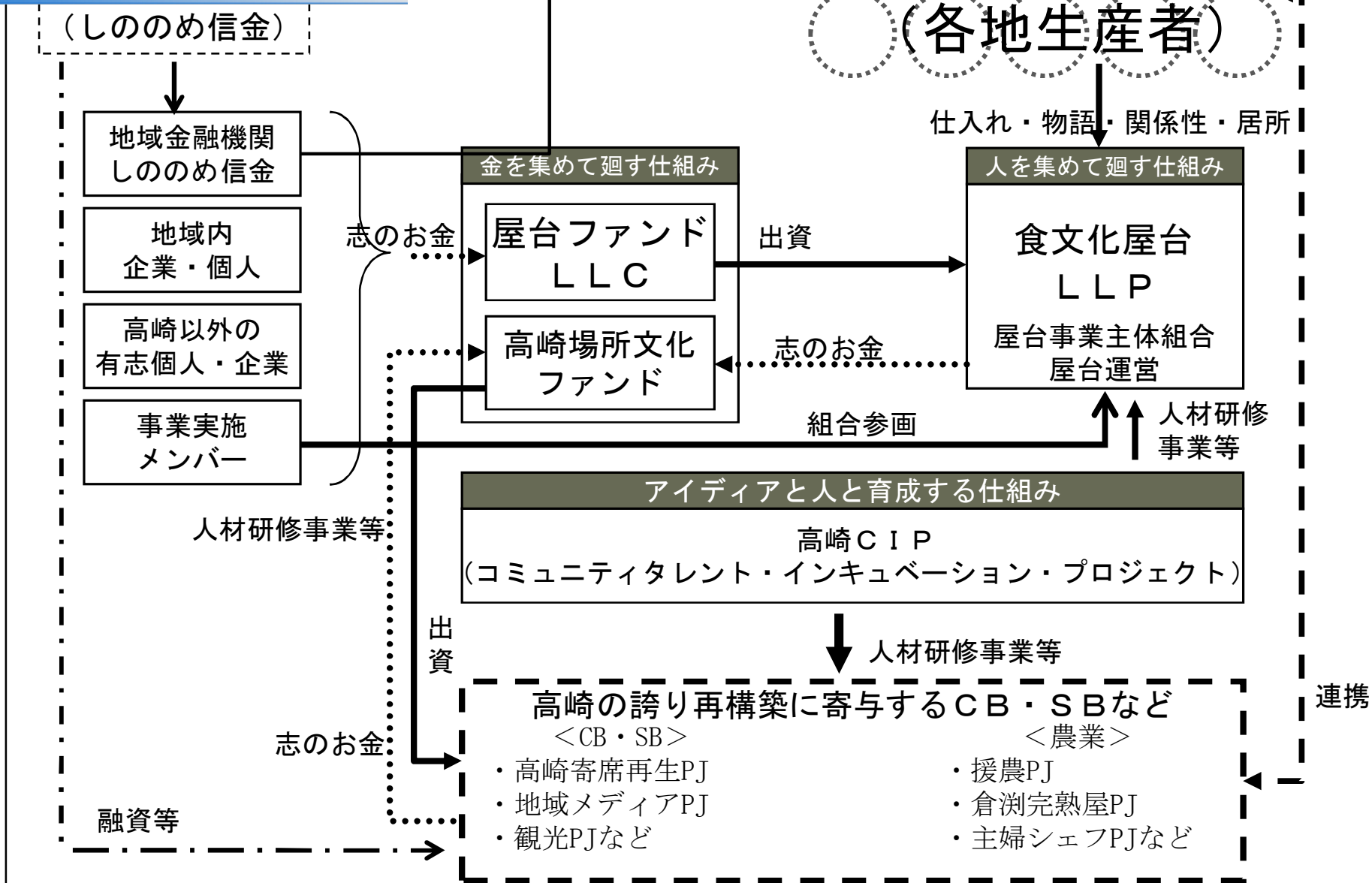


(3) 新たな金融・地域通貨モデルの構築—3つの特徴

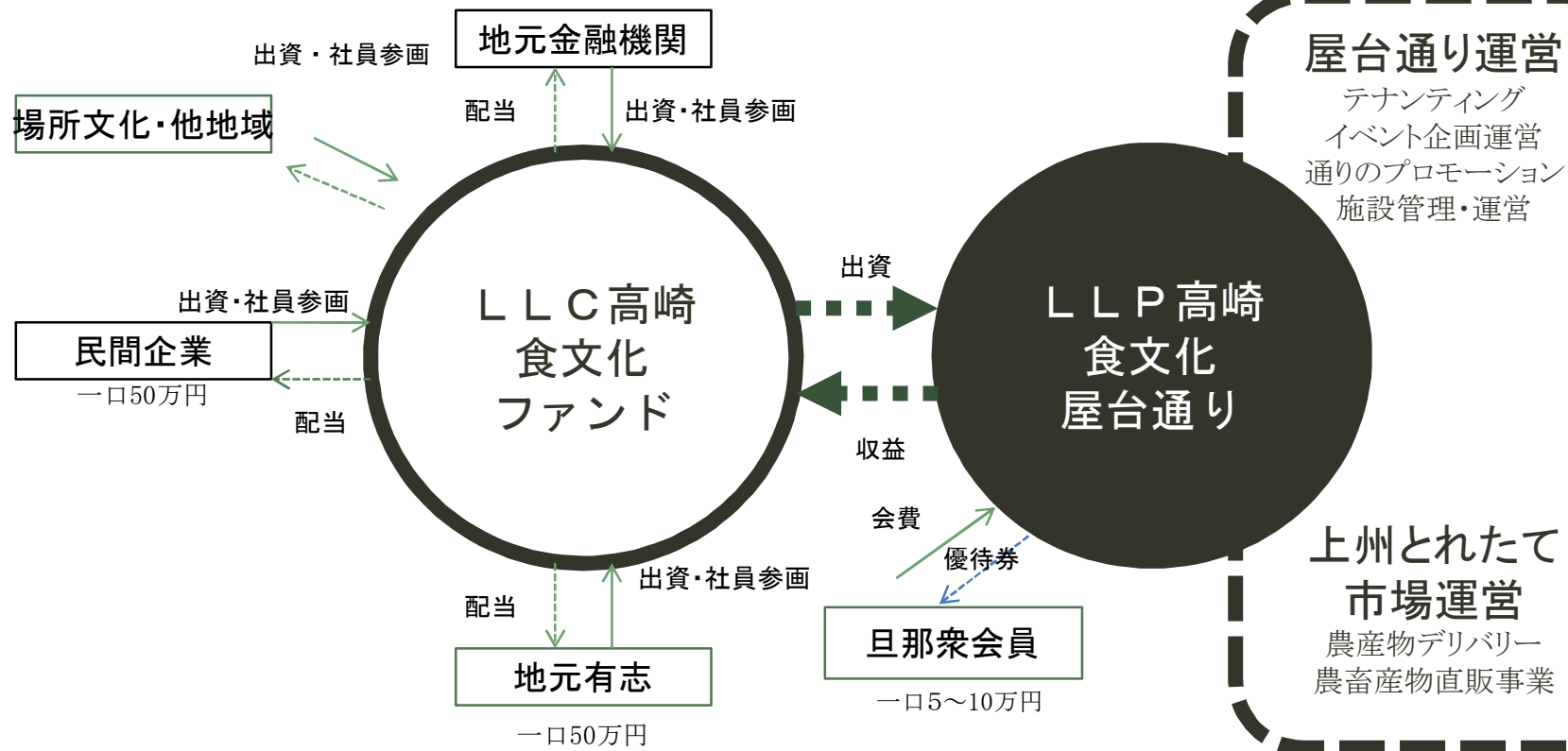
- i 運営主体(LLP)と投資主体(LLC)の分離と連携の具現化—ビジネスと意思の両立
- ii 意思の伝わる資金フローの確立—場所の価値の出資者優待と場所通貨の連携可能性
- iii 他地域展開を想定した再投資スキームへの展望—長期的資金循環(貯留)の実現

屋台通りが12月開業！一賑わいと交流人口の創出

上州の大地の恵み (各地生産者)



町屋台通り事業—地域金融機関の参画の実現



募集させていただく志金

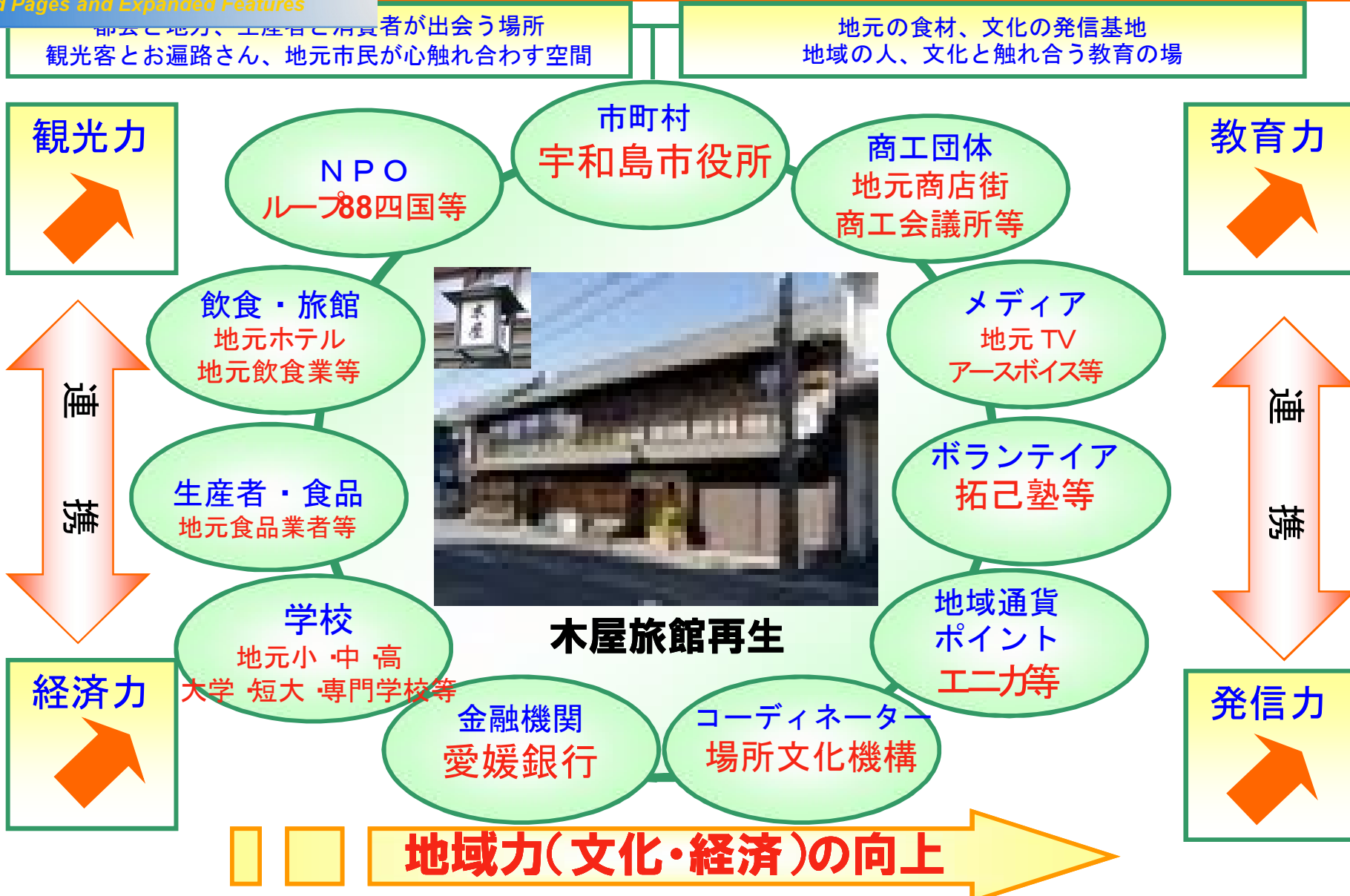
①LLC社員としてのご出資

一口50万円でLLC高崎食文化ファンドの社員にご参加いただきます。LLP屋台通りの1クール3年間の経営結果によりLLCに配当を分配します。出資要項に示したように、利益の3分の1を出資者へ還元することを目標として想定しています。

②旦那衆会員

一口10万円で会員組織に参加します。配当ではなく、優待券等を配布します。会員組織をLLP内に作り、会員事業はLLPで実施予定です。

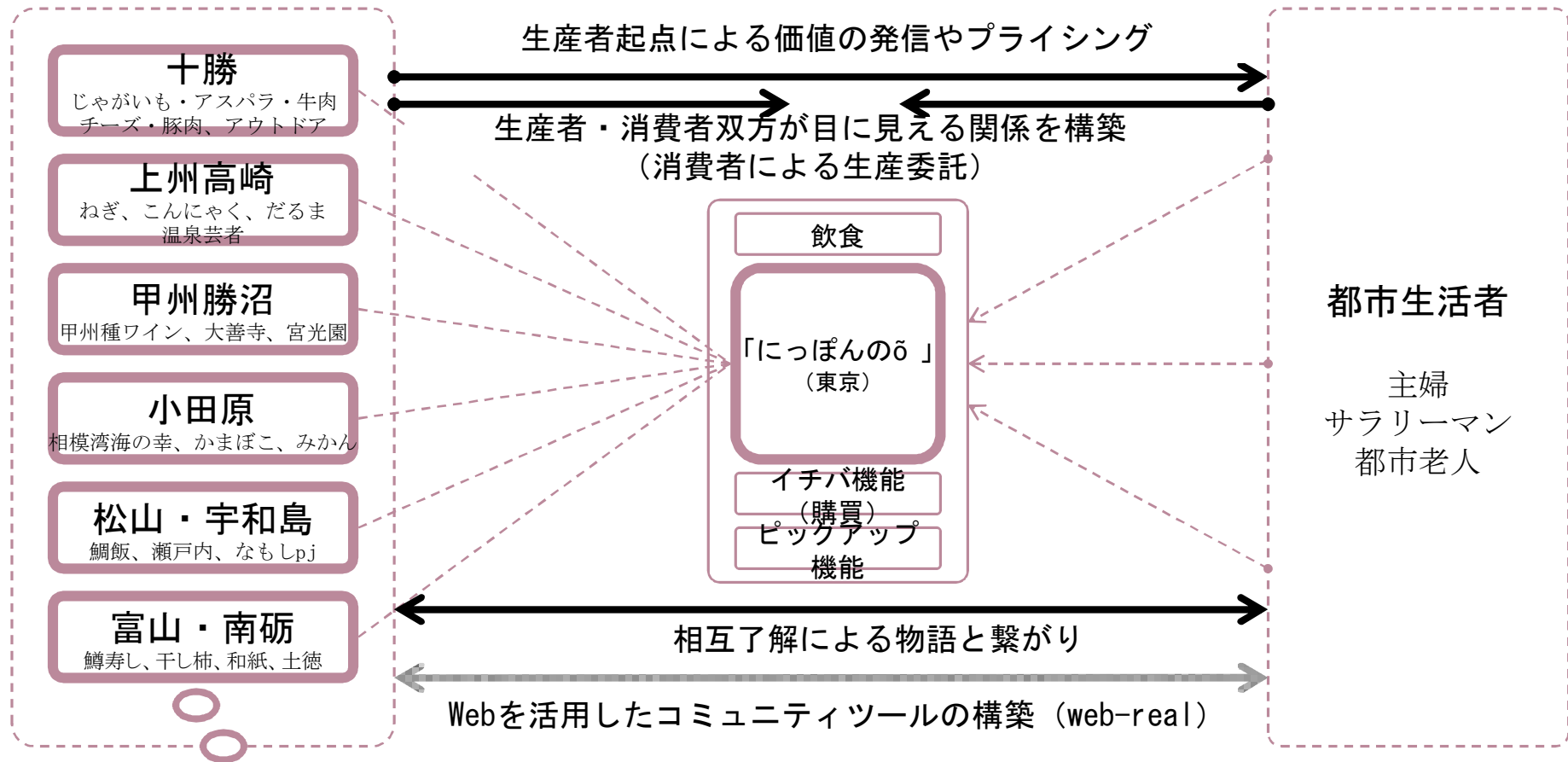
木屋旅館」再生PJの検討ー賑わいと交流人口増へ



「にっぽん」の始動 - 全国各地との賑わいの連携と交流人口増

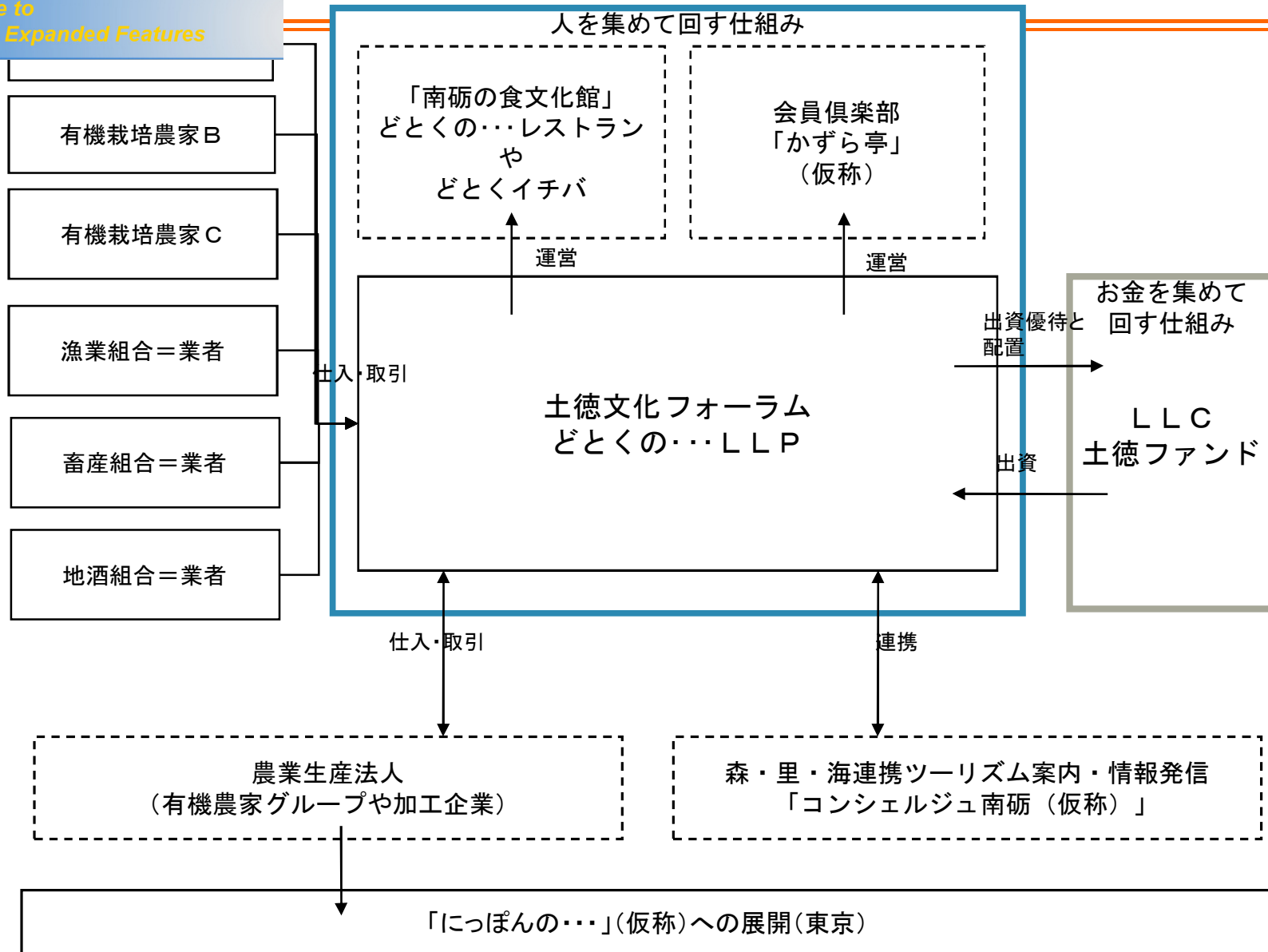
地方的な資源（人・産品・物語）と都市生活者とのコミュニケーションの場

●両者の共有する「場所」となる販売・飲食スペースで構築される、相互了解と価値創造・需要創出・人材育成

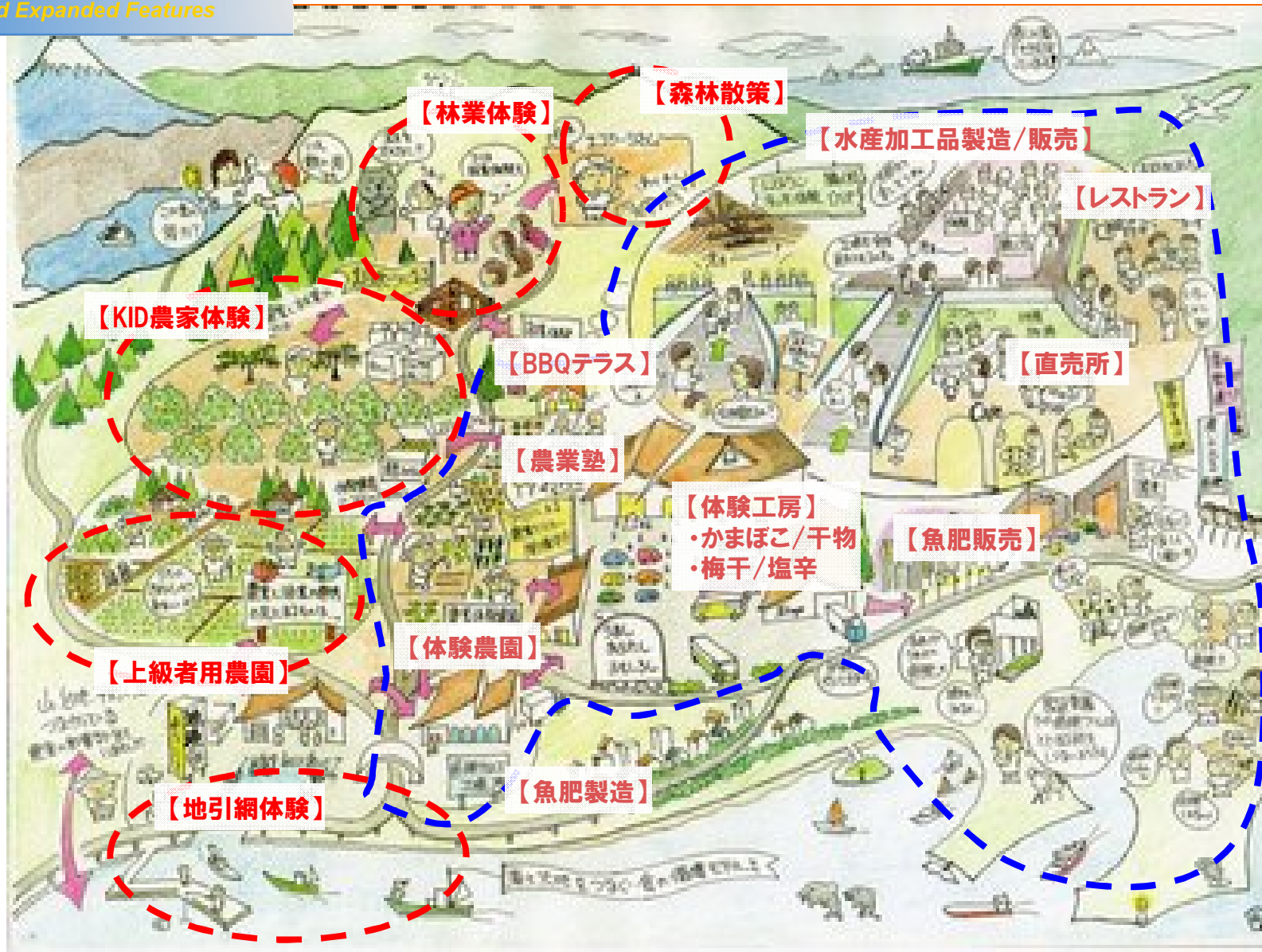


「にっぽんの…」と各地域の屋台村PJ等との有機的連動によって、人・モノ・カネの見える形での交流と賑わいが生まれ、新たな金融の仕組みも漸次具現化する。

賑わいと交流人口創出ー「にっぽんの…」とも連携へ



わいと交流人口の創出ー「にっぽんの・・・」とも連携へ 「小田原まるごとエコ・コミュニティ将来構想」



ポン・キャラバンが行く:全国15箇所で開催<函館>



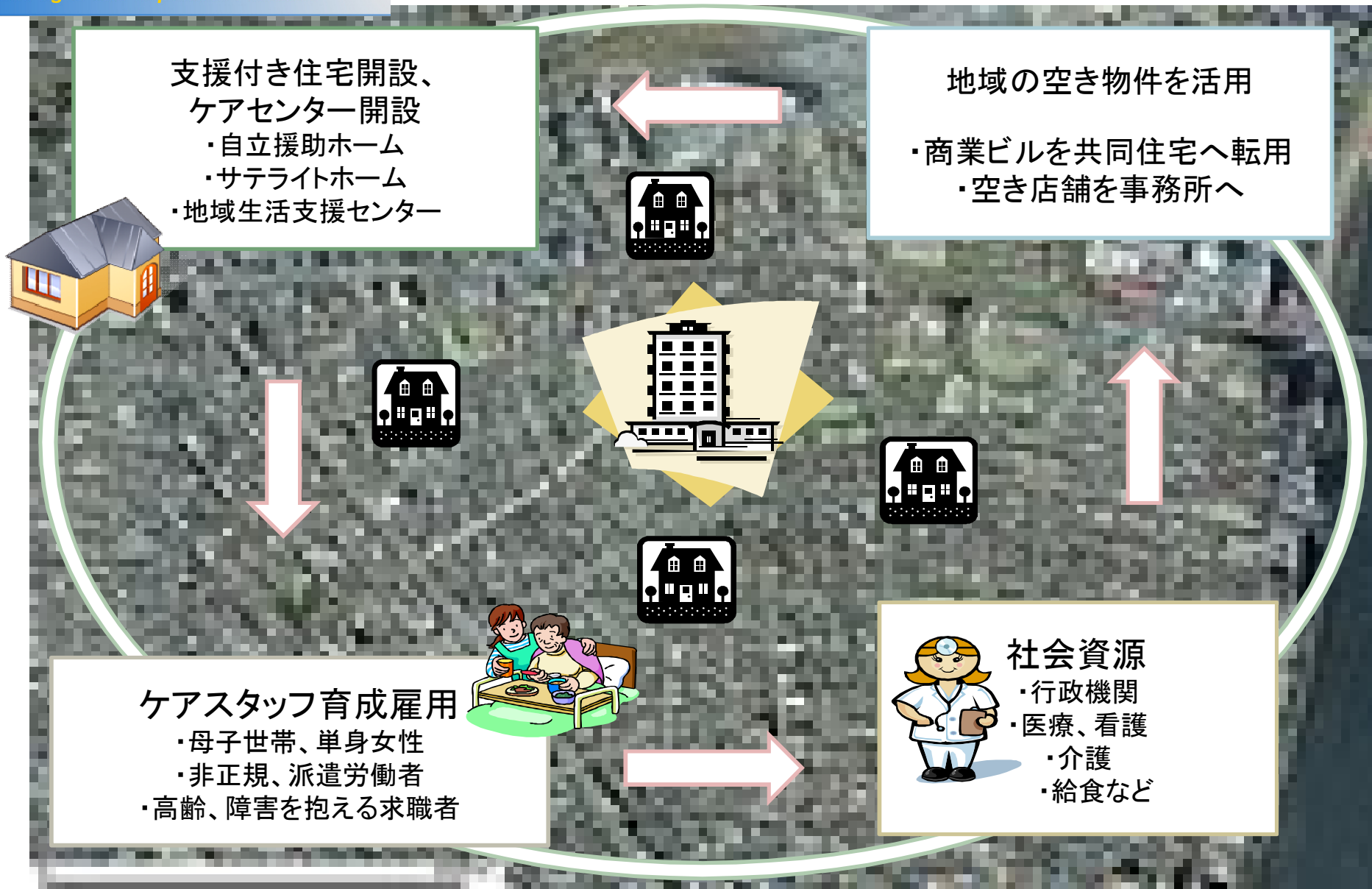
ポン・キャラバンが行く:全国15箇所で開催<福島>



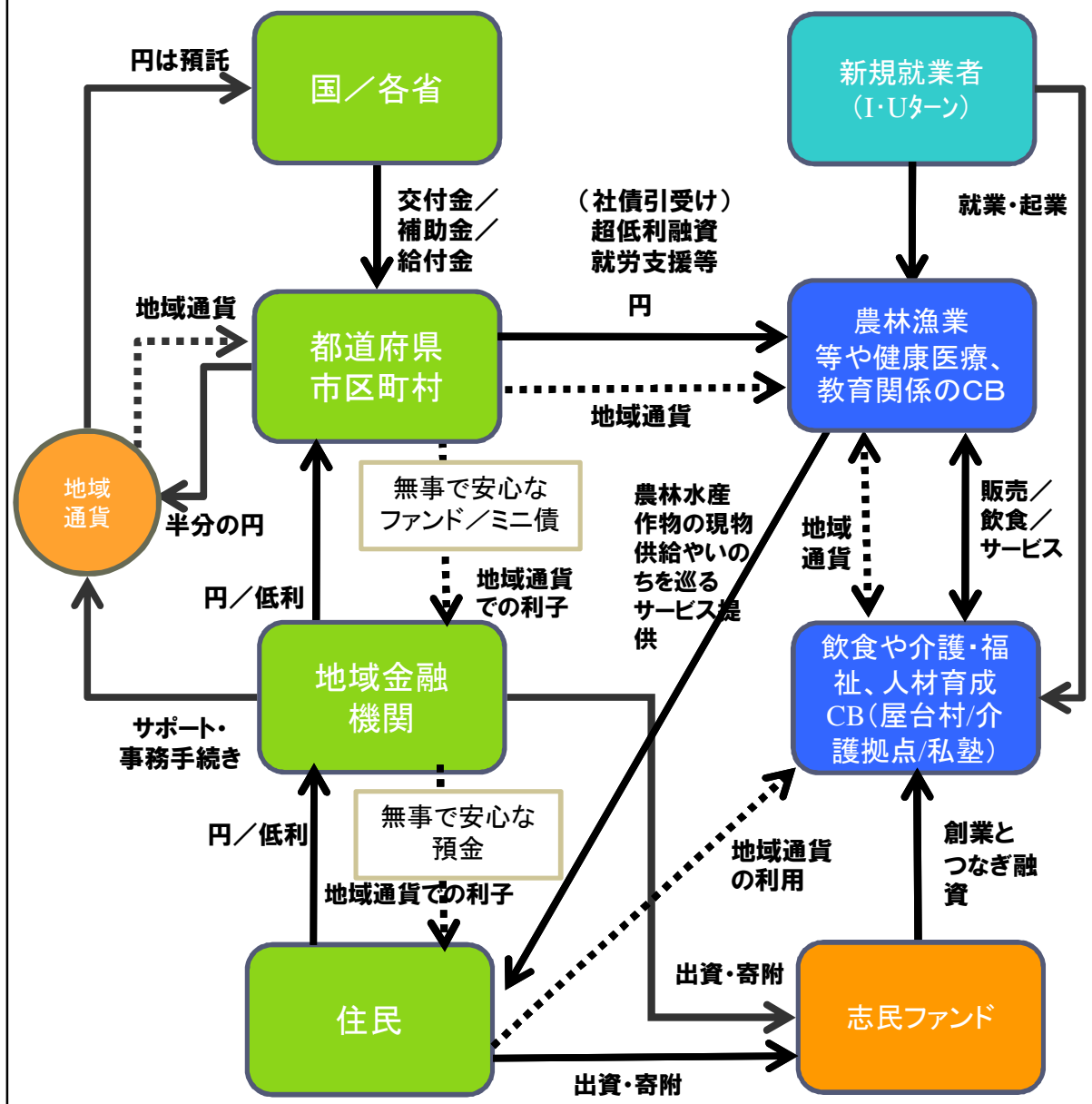
ポン・キャラバンが行く:全国15箇所で開催<福島>



のち・お金の繋がりと雇用創出（医療・介護・福祉連携 NPO 「ふるさとの会」の取組み 生活保護者自立支援）



地域での「お金の共同管理」の仕組みの構築 関係、自治体の連携によるローカルコモンズファント構想



<ポイント>
 「CBをつくり、それを廻すお金を共同でつくる。そして、それでCBをつくる」

- ・志あるお金と法定通貨の併用
 …志金は流通速度大で、商流拡大を牽引
- ・CB創出のために、従来の金融のロジックを修正する
 …長期/低利(割引)か無利子/相互扶助

<結果>
 「雇用(百姓)の創出と第一次産業起点の食・農、健康医療、学びの新たなビジネス(ヒト・モノ)の拡大」

↓

「にぎわいと無事で安心な暮らしの創出」

<県/市でなすべきこと>

- ・強いメッセージの発出: 地域からの新たな構想、住民と一緒に作る“いのち”の循環
- ・行政のロジックの緩和: 単年度ではない中長期の視野での財政措置(税、支援金の条件緩和)
- ・行政やNPO等の連携: 地域通貨の最終出口等としての受け皿や非市場取引との連携を図ること

<アジアでの運携—お金のお上手な使い方の応用>

- お金のお上手な使い方の応用をアジアに出来ないか：民間ベースの富の移転の方途

⇒ **Each individuals has a lot to share with others!**

Life means sharing! (スマナバルア氏の講演会<2009. 8. 27>より)

→ アジアの「プライマリヘルスケア支援基金」構想の具体化検討

<世界平和へのアプローチ：利他の心」の真理>

- 世界的オピニオンリーダー (ジャック・アタリ氏、ジェフリー・サックス氏等) の言葉の意味

今、世界を襲っている危機は、無秩序なグローバル化が、世界を経済的・社会的・環境的な危機に陥れていることに対する最終的な警告と受け留めるべきであり、これを見直す最後のチャンスとなるかもしれない」(ジャック・アタリ「金融危機後の世界」<作品社>)

自由放任主義の市場原理や、競争に明け暮れる国民国家の中で、増加の一途を辿る悲惨な問題が自動的に解決されることはまずないのだ。今の世界が直面する最大のリスクを回避するには、世界の国々の参加による一連のグローバルな公共投資こそが必要だ。このような投資、即ち気候変動、生物多様性の喪失、人口の急増、そして極度の貧困などと闘うためのコストは、それほど高くつくわけではない」(ジェフリー・サックス「地球全体を幸福にする経済学」<早川書房>)

⇒ しかし、そのためには、利他的行動の真理の再確認が必須と！ (ジャック・アタリ同著)。

その「利他の心」は、日本古来の心ではないか！

4. 新たな地域金融の形成に向けての論点整理 —ローカルサミットでの議論を踏まえて—

（持続可能な地域社会と地域金融）での問題提起

(1). グローバル資本主義を補完するローカルファイナンスをどう創設するか

<金融の論理の転換とダブルスタンダードの実現>

複利・短期・利殖・冷たいお金⇒⇒単利orゼロ・長期・感謝・温かいお金

<ファンドレイズ>

お金がお金を、リスク・リターン⇒⇒お金に代わる目に見える関係性・財・サービス提供

<具体的スキーム>

個別PJ (かちの・・・、高崎屋台村、につぼんの・・・等)、ガイヤファンド系 (農業向けファンド等)、お金の共同管理スキーム、地域通貨的スキームの組み込み

<成立の必要条件>

金融のスキルとゆとりへの温かな眼差し、

ハンズオンブレン等によるリスク軽減、

金融機関の巻き込み・行政の関わり方、

自らのマネー (地域通貨) 創出

(2). ソーシャルビジネスについてどう考えるか？

<ムハマドユヌス氏のグラミンバンク展開を日本で実現できないか？>

⇒庶民金融の復活は出来ないか？

<ソーシャルビジネスを金融面からどう捉えるか？>

⇒配当なし、金利の取り方のダブルスタンダード適用、所有権の移転

／(持続可能な地域社会と地域金融)での問題提起

(3). 雇用を創出しつつ金融資産のスムーズな移転を促す仕組みの創出
＜いのちの3分野を巡る雇用と所得(金融資産)の移転＞

食・農／にぎわいの創出と無事で安心な食—高所得から低所得へ→若者の雇用

健康医療・介護／無事で安心な心身—低所得・高齢者から若年層へ→若者の雇用

教育／いのちの次世代への繋がる—高齢者から若年層へ→若者の雇用

＜アジアとの所得移転スキーム＞

プライマリヘルスケア基金(仮称)—高所得からアジアの低所得へ→アジアの若者雇用と
相互交流の促進

(4). 新たな地域金融の模索(愛媛銀行福富氏他)

地域なくして地域金融なし、商流なくして金流なし:地域を知り、お客を知っているか?

計るが全てで感じることを忘れてはいないか:効率化・スコアリングで目に見える関係がない

地域金融機関の価値とは:地域の歴史の中で評価されているか?

金融機関の収益とは:リスクを押し付け、超過収益のかどの追求を図っているのでは?

間接金融・ベンチャーキャピタルモデルの矛盾:新たな直接金融的アプローチは可能か?

● セッション・キーテーマ

1. リーマンショック以来、税収減の一方で危機対応の支出増という形で、国を經由してお金を廻す仕組みがうまく作動しなくなっている（財政バランスの大幅悪化）状況下、いのちを守る地域にお金をきちんと廻す仕組みをどう作るか？
2. 効率化、リスクヘッジのための担保金融による収益極大化に走っている現間接金融のあり方自体や株価の右肩上がり前提としたベンチャーキャピタルの矛盾が表出しているという認識のもとで、それに変わる金融機関の仕組みは如何か？—もうける金融から寄り添う金融へどう変わるか。
3. 冷たいお金が支配する米国型資本主義には、戻るべき過去が無いが、日本には、無尽（今治無尽<造船>等）や講というかつての懐かしい世界があった以上、それをどう取戻せるのか？金融工学のもとの金融には、本来的にいのちを通わすことは出来ないのではないか？

● 志民によるキーテーマに対する具体的政策提言

1. 地域（志民、地域金融機関、自治体等目に見える関係）が自らリスクテイクし、いのちを紡ぎ・繋ぐ、財・サービスの提供を実感する中で、お金を出し、廻す志民金融を作る。そして、それを国レベルに一般化せず、各地域での実践のつながりという形で、積み重ねていく。
2. かつてあった金融の姿（相手を良く知り、リスクを取って、スコアリングのような画一的な対応ではなく、無尽等の相互扶助の仕組みも持つ）を取戻し、更に新たな金融の仕掛け（相手と一緒にリスク・リターンを分かち、目に見える関係性を大切にする、利子補給等で長期で円滑な資金供給をしていく）を付与していくことで、地域金融機関が地域にお金を廻す仕組みを作り上げることができないのではないか。
3. 志民金融もいのちを巡らす手仕事（知性、身体性、霊性が一体化したもの）の一つであると認識し、効率化・大きいを追求せず、手作業・小さいを旨にしつつ、いのちを巡る3分野を中心に、小さな雇用創出に基づく所得（資金）移転も図りながら、お金を廻していく。